繪入童謠集

電の花

北原白秋

兎の電報

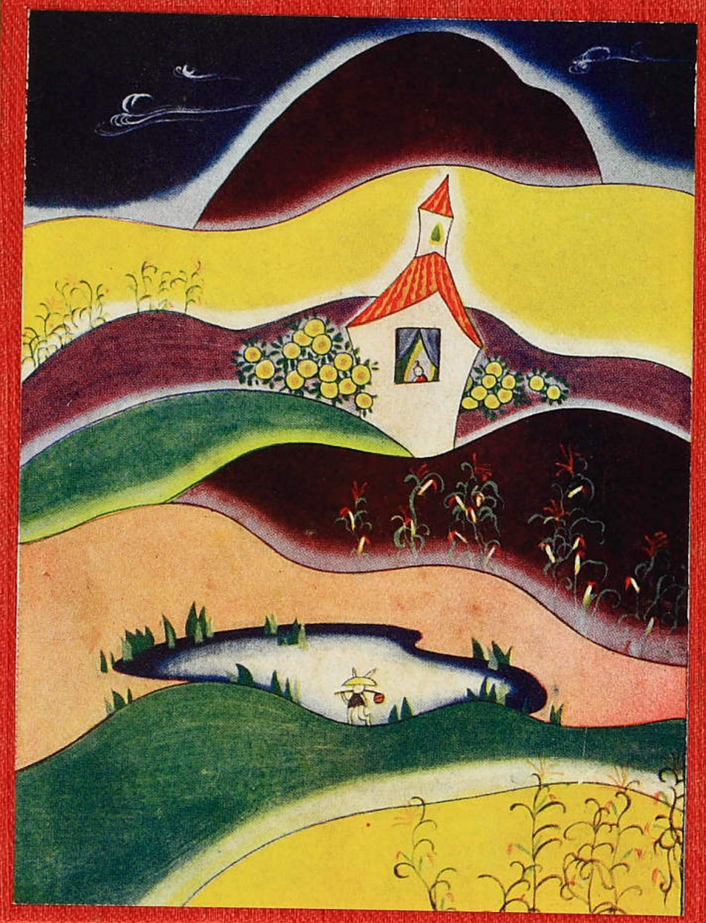
北原白秋

繪入童謠集

電の花

アルス發行

救電の光

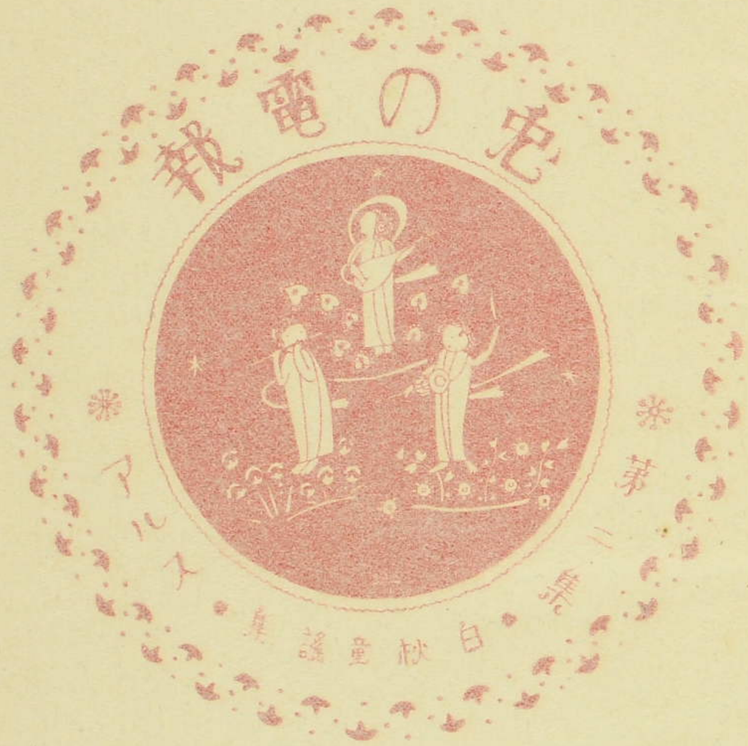


兎の電報

北原白秋

スルア

行 兒


第二集
白秋童謡集
アルス
我竜の宮

電の虫
第三集
アルス
白秋童謡集

はしがき

「とんぼの眼玉」が綺麗な本になつて出てから、もうあしかけ三年になりました。あの頃は恰度、私の木兎の家の庭に紅や黄の葉鶏頭がまるで火のやうに燃えたつて大きな瑠璃色の眼玉を持つた蜻蛉の家族が幾組となく群れて來て、焦茶の背嚢を背負つた山蜂や、紫の長い髭

を開いた紫に赤の點々のある揚羽の蝶やと、朝に夕に舞ひつれてゐました。それが時とすると、萱屋根に麥稈の壁のお粗末な家の小窓からまぎれ込んで來ては、私の童謠を書いてゐる頭の上で羽ばたいたり、硝子戸にぶつかつたりしました。夜になると、黑い小さな矮鷄がやはり私の頭の上の棟木に一羽留つてやすむのでした白い矮鷄も二羽ゐましたが、これらはいつも仲よく木兎の顏見たいな入口の廂の上に留つてゐました。

葉鷄頭が枯れて了ふと、それから冬が來て、また年がかはりました。

その去年の三月頃から、私は「とんぼの眼玉」の中にあるその挿畫のあの赤い瓦の家見たいなのに住んで見たくなりました。そして建てて見たくなりました。それでいよいよ建てようとすると、私のこの美しい心もちを隣のお坊さんがすこしも知つてくれないで、困つた掛合ばかりするので、何も彼もいやになつて、そのまま

自分の家からぽつと出て了ひました。どんなに美しい生活をしようと爲ても、傍でさういふ風ではとてもだめだと思つたのでした。もう欲も得も無くなつて了つたのです。今夜は何處に泊らうかとうしろの山から山へほつつき歩いて行きますと、もう野山のあちこちには紫のすみれの花が盛りでした。

すみれすみれ山の貍の巣は何處ぞ
かう歌ひ乍ら私が先に行くと、うしろから黑と白の

矮鶏や知路といふ小犬を連れて、腹を立て立て私の妻が蹤いて來ました。

すると、後からお坊さんがあやまりに來たので、またお山の木兎の家へ歸ることになりました。歸ることにはなりましたが、今度は妻の方で、あなたのやうに自分の家から逃げ出すやうな方はあまり阿呆らし過ぎる、私はもつと人間らしい世界に出て行き度いと云つて、遠いお國へ行つて了ひました。それで私はたうとう一

人ぼつちになりました。

一人ぼつちになつて見ると、もう赤い瓦の家も何にもほしくは無いのでした。でも今さら建てかけて止めると大工や佐官たちが困ると思つて辛抱してゐました永い間辛抱してゐました。そのうちに新らしい鉋屑の散らかつたお庭に白い芥子の花や赤い虞美人草が咲いて、蝶々や、鳩ぽつぽや、電報配達のぴよんぴよこ兎やなどが遊びに來るやうになりました。日の暮になると

げつげつと蟾蜍が啼いて、桃色のお月様が桃色の合歡の花の上からよくあがつてまゐります。すると、二階の露臺の欄干にも木兎が來て留つて、よくほうほうと啼いてゐるのでした。そうした晩には私もその露臺に出て、大きな籐の腕椅子に恰度お伽噺の王様のやうに凭れかかつて、よく、あの「とんぼの眼玉」の中の「山のあなた」や、「ほうほう螢」やを歌つて、うつとりと山や海の薄明を眺めてゐるのが癖になつてゐました。寂しかつ

たのです。とても寂しかつたのです。すると、ほつほつと螢が青く光つてあちらこちらの藪かげから飛んで來るのでした。それはずつと時候が遲れてからでも、私がその螢の歌を歌ひ出しさへすれば何處からとなくきつと螢が舞うて出るのでした。それは不思議なくらゐでした。

百合の花が萎れて秋が來ると、また庭が火事のやうに紅い葉鷄頭でいつぱいになりました。そしてコスモ

スや黄色いカンナの花も咲き出し、家の前の棕梠の葉つぱの裏には薄黄色の新らしい蜂の巣が下りましたがかはいさうな事には矮鷄が三羽ともどこかの大きな病犬から喰ひ殺されて了ひました。犢のやうな大きなその犬がまた花壇から何から荒らして了ひました。

それから冬が來て、時雨が降り續き、雪がふり、海山の眺めも急に荒々しく寂しくなつて了ひました。そして私はやつぱり一人ぽつちでした。時々、山の下のかは

いい子供たちが、木兎のをぢさん、木兎のをぢさんと云つては遊びに見えましたが、あんまり寒くなるとだんだん來なくなつて、山の鴉ばかりが、枯木のてつぺんでかあかあ啼いてる丈になつて了ひました。

今年になつて、赤い瓦の家が、すつかり初めの望み通りに綺麗に仕上り、梅が咲き、櫻が咲き、緋桃が咲き、八重の薄紅椿が咲いて、あたりの景色もいよいよ明るくなりましたが、また悲しい事には、あのかはいい小犬の

知路が、急に眼が青くなつて盲目になつたと思ふと、大暴風雨の夜中にたうとう亡くなつて了ひました。

その頃から私には、よく高い屋根裏に上つて、山の向うの青い空や、海の向うの葡萄色の水平線やを、ただ何と云ふ事なく眺め見入つてゐる日が多くなりました。寂しいお伽噺の王様の木兎のをぢさんに、お妃の新らしい木兎のをばさんが來て呉れると云ふ事になつたのはそれから程なくでした。私は私の木兎の家の前に花

盛りの紅白の牡丹を二株兩側に植ゑて、そのをばさんを待つてゐました。たうとうやつて來ました。庭にも赤い虞美人草がまた咲き出して、日の暮になるとまた、木兎がほうほうと枇杷の木の上で啼いてくれるやうになりました。

子供たちもよく遊びに來てくれます。私は今に赤い瓦のこの家の屋根裏を木兎の學校にして、その子供たちと童謡を作つたり歌つたりして遊びたいと思つて居

ります。

木兎のをぢさんを、もうもう一人ぽつちにしてはいけませんよ。

大正十年五月

相州小田原木兎の家にて

白秋

目次

兎の電報……一
鵞の小屋……三
栗鼠、栗鼠、小栗鼠……七
お人形焼く家……一一
月夜の家……一五
まゐまゐつぶろ……二〇
とんからこ……二二
かやの實……二五

どんぐりこ……二八
眞夜中……三二
雪のふる晩……三六
大寒、小寒……四一
雉子の尾……四五
わたしの家……四七
葉つぱつぱ……五〇
お馬暑かろ……五四
麵麭と薔薇……五八
蝶々と仔牛……六一

低山、小山……六三
仔馬の道ぐさ……六六
里ごころ……七〇
夢の小函……七四
離れ小島の……七七
今夜のお月さま……八一
九十九島……八五
ちんちん千鳥……九〇
白い牛黑い牛……九四
白い白いお月さま……九八

祭の競馬……一〇〇
白い鳥……一〇二
白い木のかげに……一〇四
蜂の子……一〇七
肩ぐるま……一〇九
栗と小栗鼠……一一三
ぽつぽのお家……一一五
げんげの畑……一一八

挿畫目次

初山滋氏

表紙
外装
扉
兎の電報（口繪三色版）
月夜の家……一六
まゐまゐつぶろ（三色版）……二〇
とんからこ……二三

かやの實……二六
どんぐりこ……二九
わたしの家……四八
葉つぱつぱ……五一
麵麭と薔薇……五九
蝶々と仔牛（三色版）……六二
低山、小山……六四
離れ小島の……七八
今夜のお月さま……八二
九十九島……八七

白い牛黑い牛……九五
白い鳥……一〇三
肩ぐるま……一一〇
ぽつぽのお家……一一六

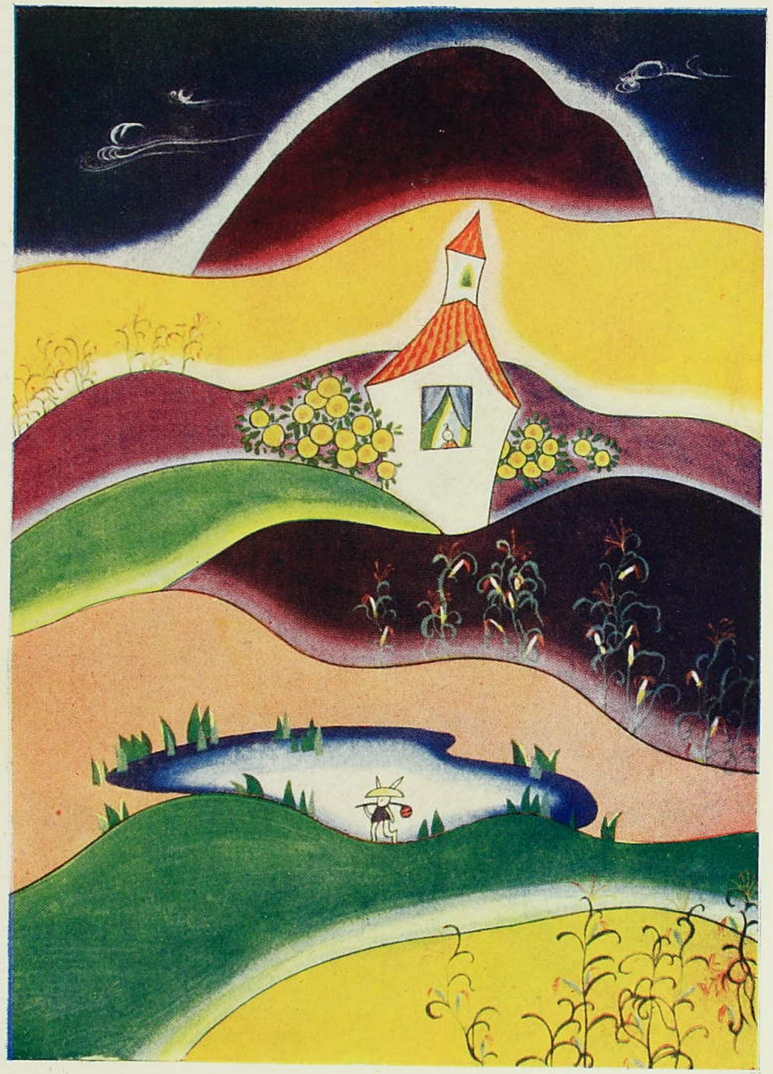
矢部季氏

鵞の小屋……三
栗鼠、栗鼠、小栗鼠……九
お人形燒く家……一一
眞夜中……一三

雪のふる晩……三八
大寒、小寒……四二
雉子の尾……四四
お馬暑かろ……五四
仔馬の道ぐさ……六七
里ごころ……七一
夢の小函（三色版）……七五
ちんちん千鳥……九一
白い白いお月さま……九九
祭の競馬……一〇一

白い木のかげに……一〇五
蜂の子（三色版）……一〇七
栗と小栗鼠……一一三
げんげの畑……一一九

兎の電報



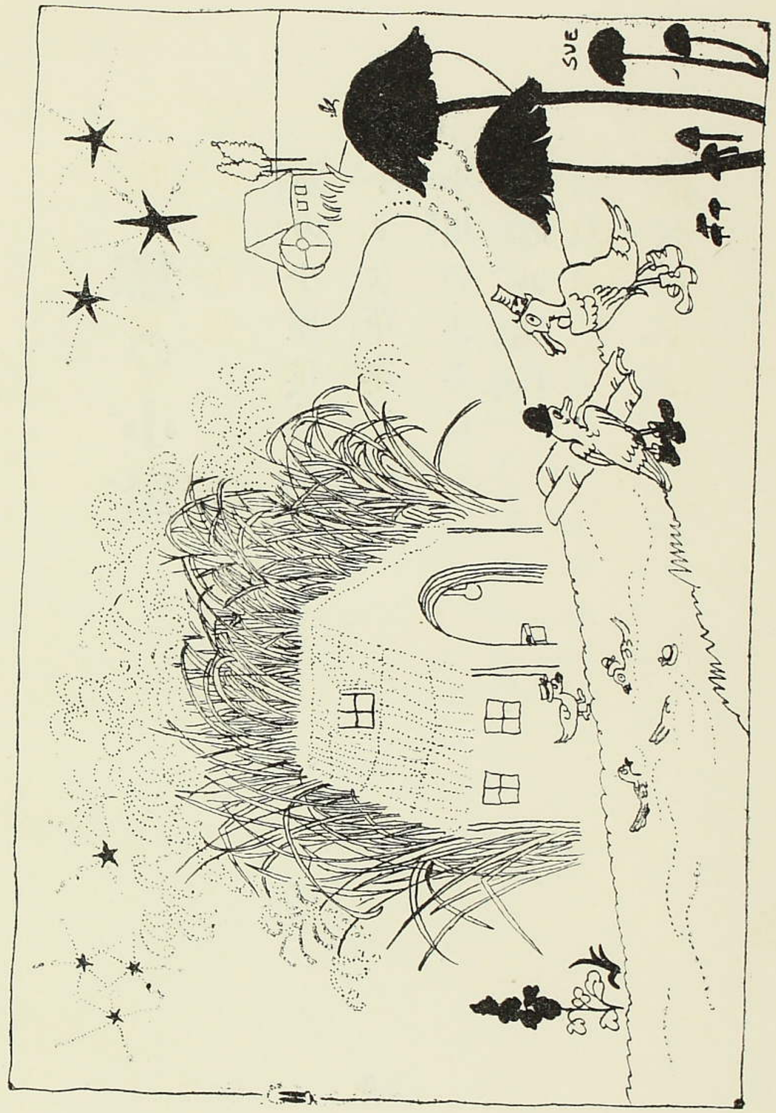
兎の電報

えつさつさ、えつさつさ、
ぴよんぴよこ兎が、えつさつさ、
郵便はいだつ、えつさつさ、
唐黍ばたけを、えつさつさ、
向日葵垣根を、えつさつさ、

兩手をふりふり、えつさつさ。
傍目もふらずに、えつさつさ、
「電報。」「電報。」えつさつさ。

鶩の小屋

鶩の小屋は、
小さな草家。
小川のふちに、
芒のかげに。



鵞の小屋は、
夕焼、小焼、
がアがア鵞、
おねんね鵞。

鵞の小屋に、
お星様七つ、
鵞のかずほど、

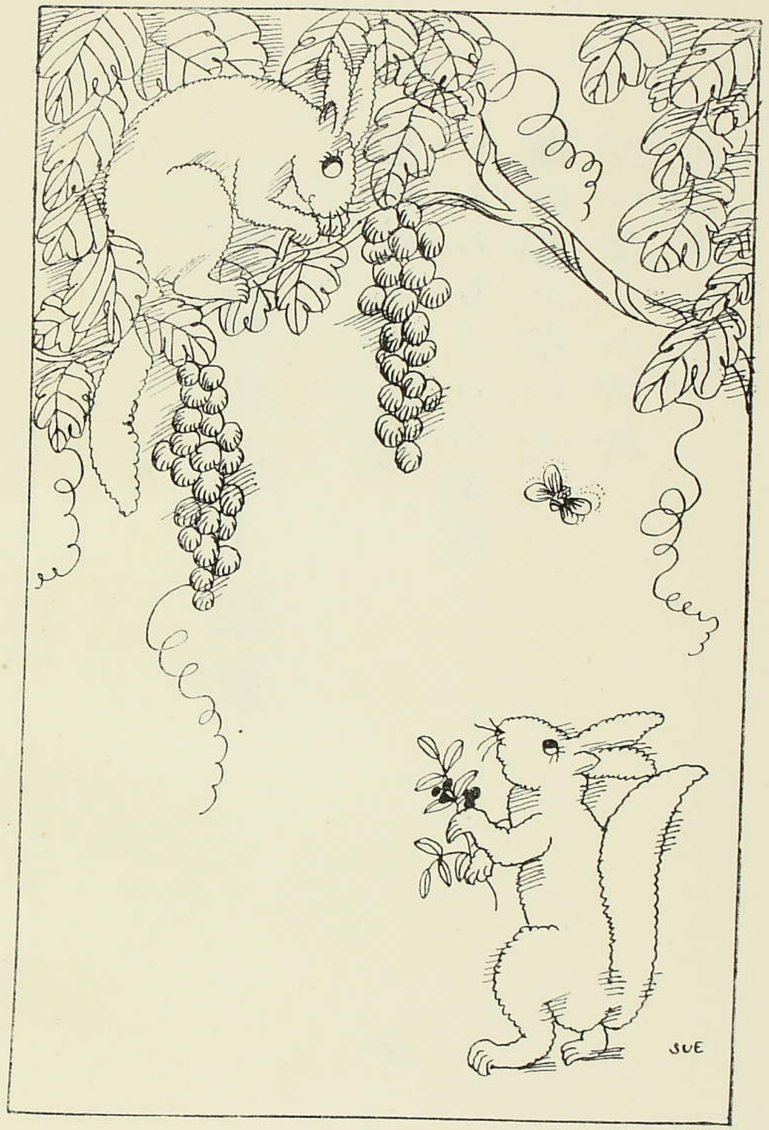
ちら、ちら、ちらよ。

栗鼠、栗鼠、小栗鼠

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちよろちよろ小栗鼠、
杏の實が赤いぞ、
食べ食べ小栗鼠。

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちょろちょろ小栗鼠、
山椒の露が青いぞ、
飲め飲め小栗鼠、

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちょろちょろ小栗鼠、
葡萄の花が白いぞ、



揺れ揺れ小栗鼠。

お人形焼く家

お人形焼く家、
お竈が一つ、
あれ、あれ、煙が
海へなびく。

お人形焼く家、
あばら屋だけど、
お庭の鶏頭は、
今が盛り。

お人形焼く家、
お人形だけか、
いえ、いえ、子供が、

籠にひとり。

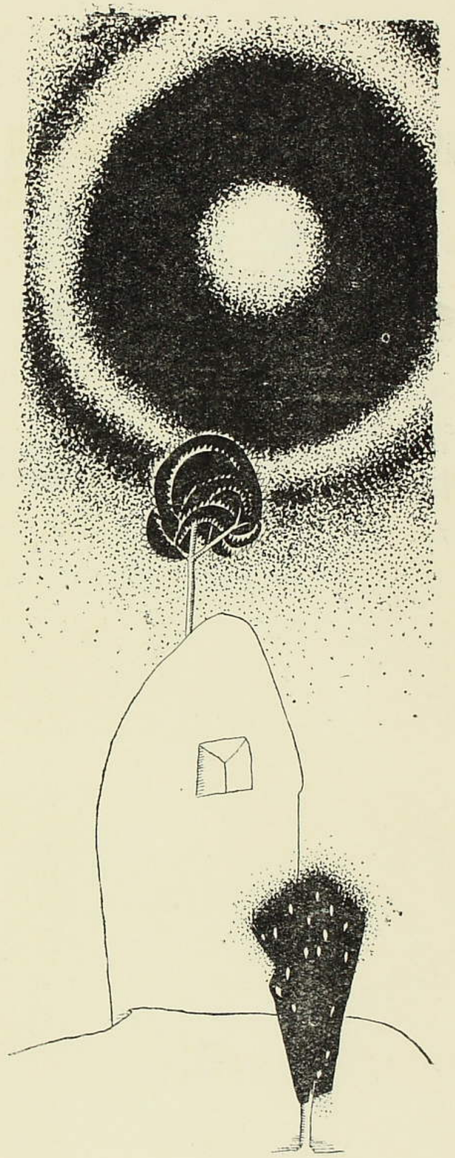
お人形焼く家、
さびしうないか、
いえ、いえ、ぽつぽも、
來てはあそぶ。

月夜の家

壞れたピアノに、
壞れ椅子、
誰が月夜に彈いててか、
誰もゐもせず、音ばかり。

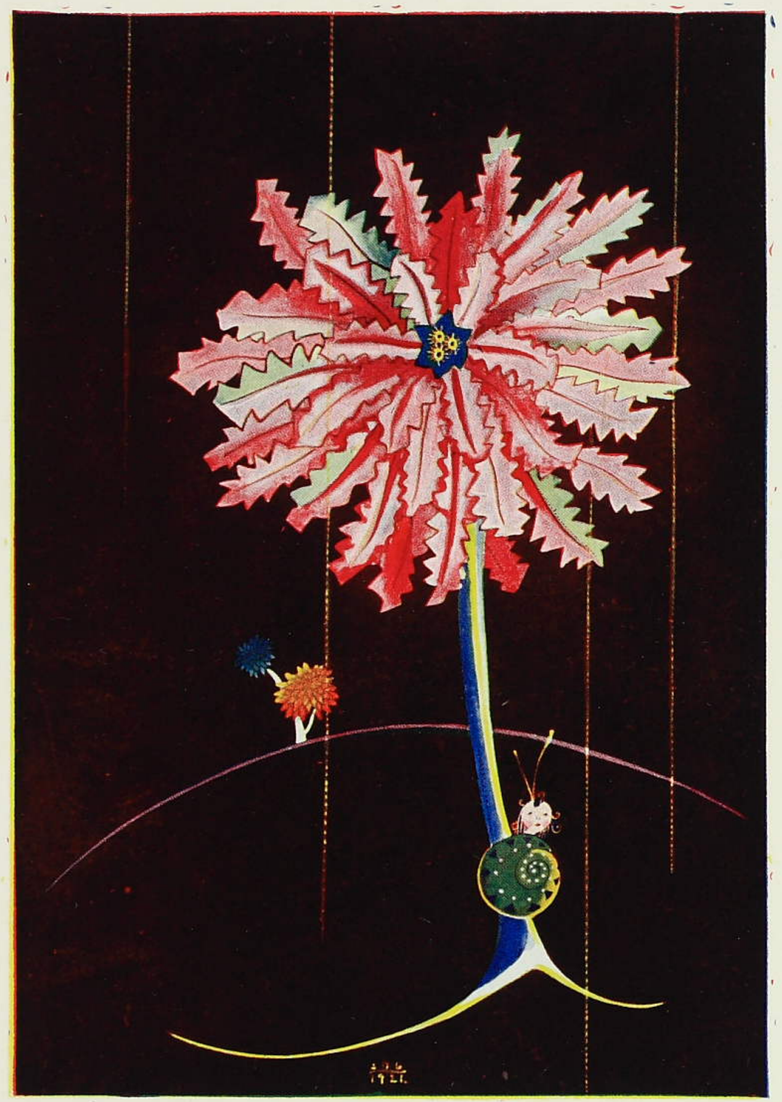
白い木槿に、
青硝子、
母様もしかと來て見ても、
中には月のかげばかり。

ときどき光る
眼が二つ、
黑い女猫の眼の玉か、



それともピアノの金の鋲。
壊れたピアノに、
壊れ椅子、
誰が彈くやら、泣くのやら、
部屋には月のかげばかり。
空には七色、

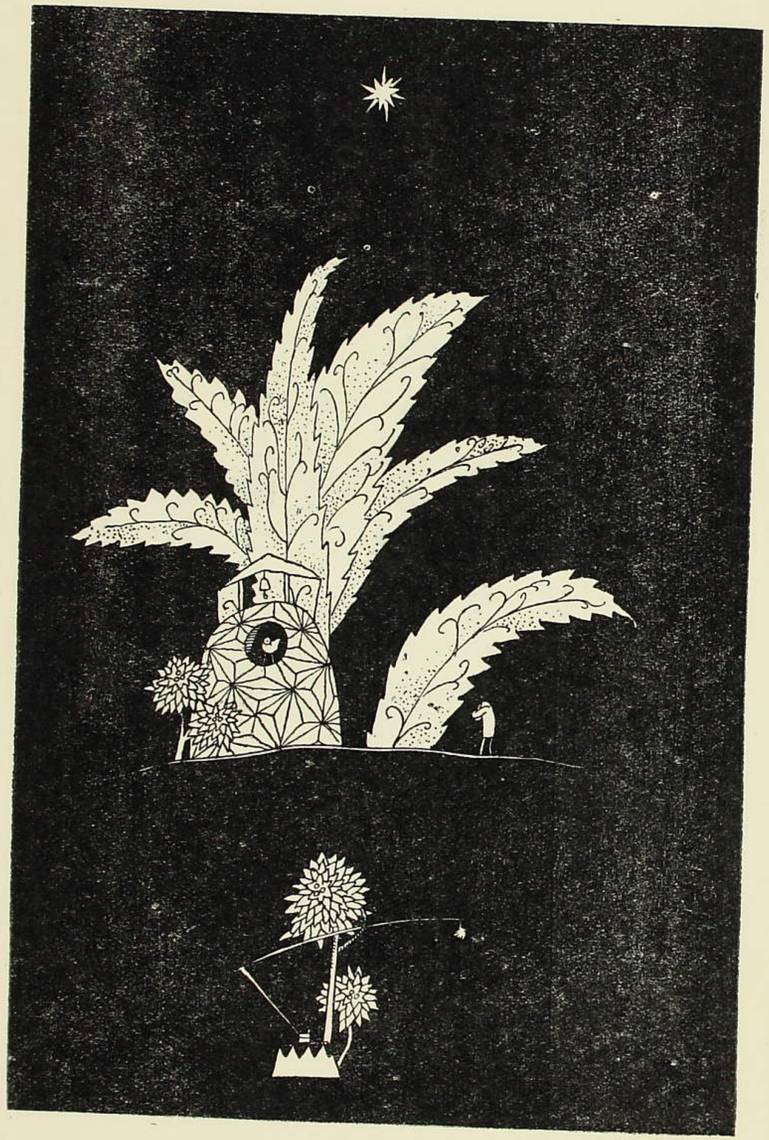
月の暈、
いつまで照るやら、照らぬやら、
壊れたピアノの音ばかり。



まるまるつぶろ

緑の殻は、
冷たい殻は、
生れて直ぐか。
まるまるつぶろ、
まだ角若い。

雨、雨、やめよ、
まだ雨痛い。
一つの角で、
お父さんどこぞ。
一つの角で、
お母さんどこぞ。



とんからこ

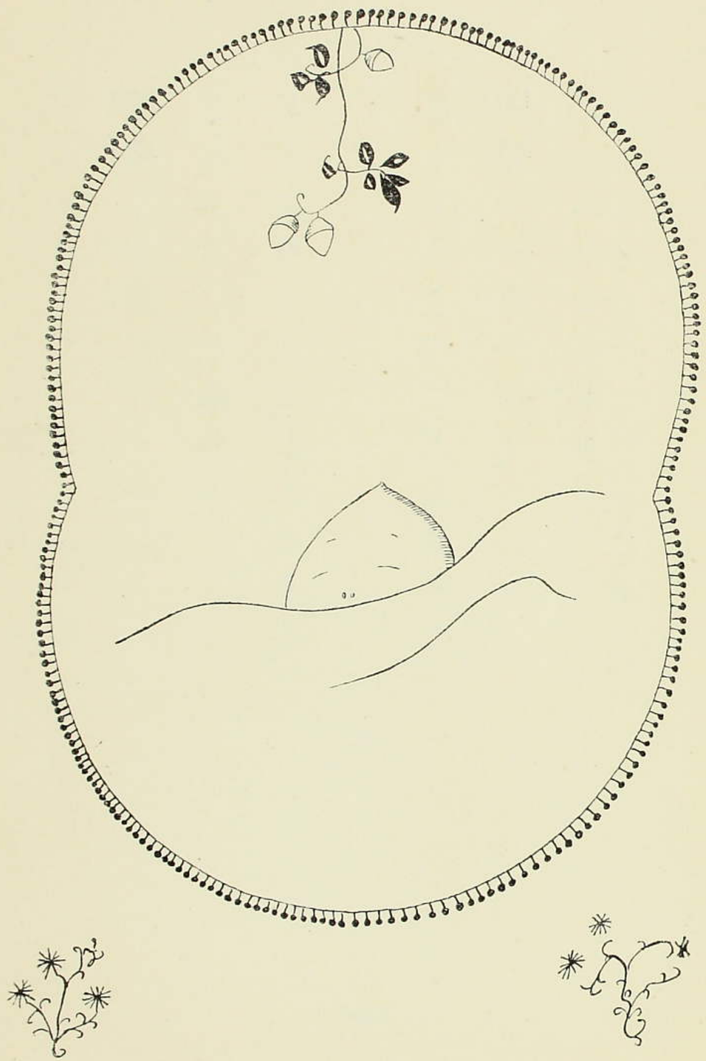
舌を切られた子雀は、
子雀は、
泣く泣く、お宿へかへります。
泣いても泣いても口きけず、
ほろほろ涙で、とんからこ。

春着のべべでも織りましよか。
とんとんからりこ、とんそろり。
とんとんからりと織つたとて、
織つたとて、
切られたお舌は川の中。
とんとんからりこ、とんそろり。
ほろりこ、ほろりこ、とんほろり。

かやの實

こんがり、こんがり、燒けました、
お山で拾うた榧の實、
こんがり、こんがり、焦げて來た。
ひとつは坊やにあげましよか、
ひとつはお婆が食べてあぎよ。

こんがり、こんがり、焼けました、
お山で拾うた榧の實。



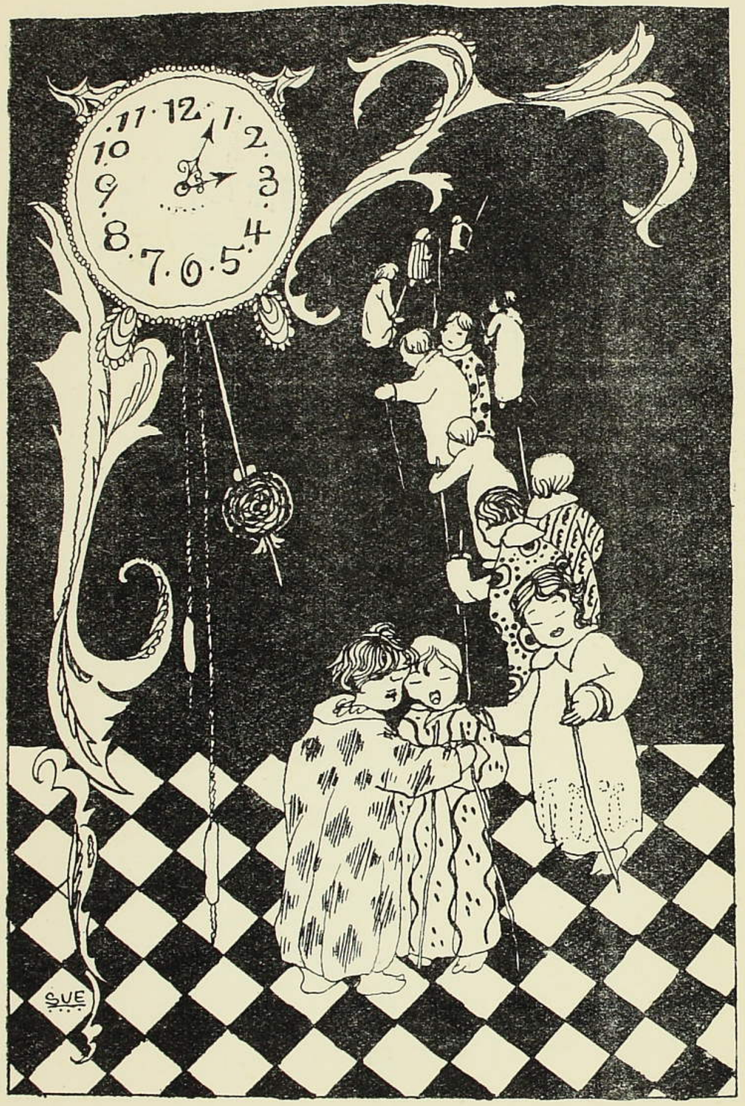
どんぐりこ

どんぐりこつこ、どんぶりこ、
團栗こが水に、
どんぶりこと落ちる。
どんぶりこつこ、どんぐりこ。

どんぐりこつこ、どんぶりこ、
團栗こが夢に、
どんぶりこと落ちる。
どんぶりこつこ、どんぐりこ。

どんぐりこつこ、どんぶりこ、
團栗こが夜つぴて、
どんぶりこと落ちる。

どんぶりこつこ、どんぐりこ。



眞夜中

小盲目、盲目、
杖ついた盲目、
眞夜中過ぎると、
コッツ、コッツ、コッツコッツ。

小盲目、盲目、
ぞろぞろ盲目、
時計の中から、
コッツ、コッツ、コッツコッツ。

小盲目、盲目、
コッツコッツ、盲目、
一人で寝ますと、

コッツ、コッツ、コッツコッツ。

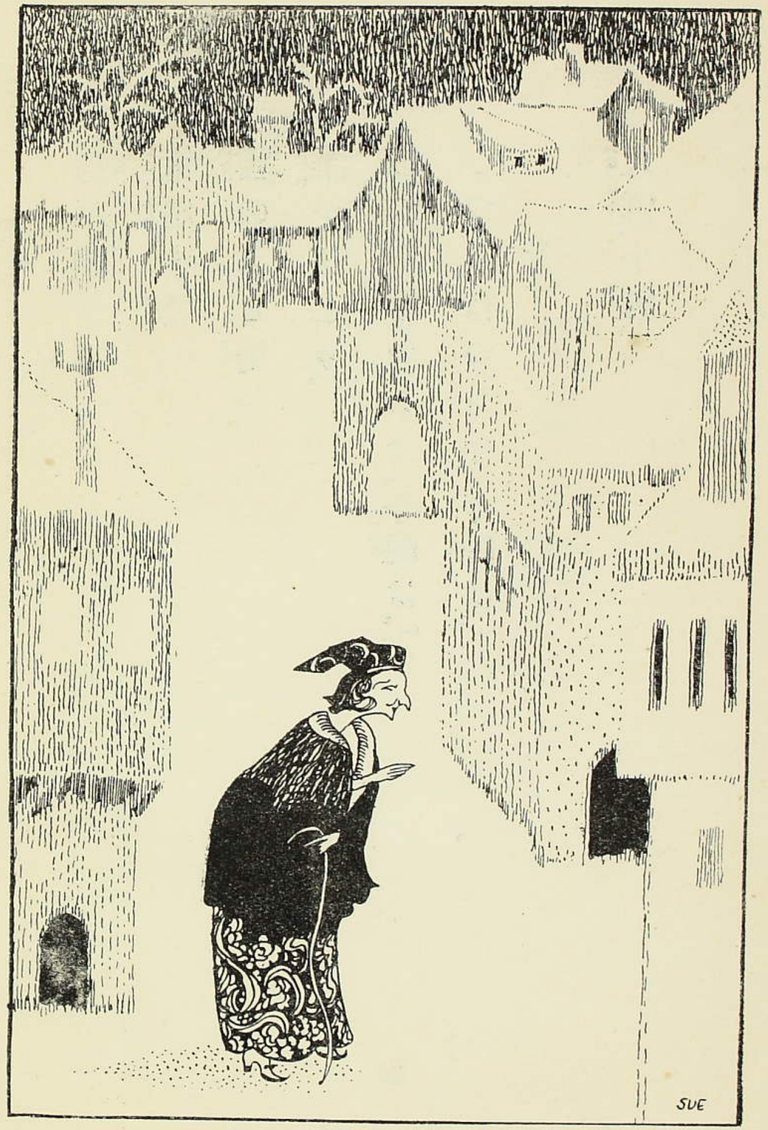
雪のふる晩

大雪、小雪、
雪のふる晩に、
誰か、ひとり、
白い靴はいて、
白い帽子かぶつて。

大雪、小雪
雪のふる街を、
誰か、ひとり、
あつち行つちや「今晩は。」
こつち行つちや「今晩は。」
大雪、小雪、

雪のふる中を、
誰か、ひとり、
「泣く子を貰はう。」
「寝ない子を貰はう。」

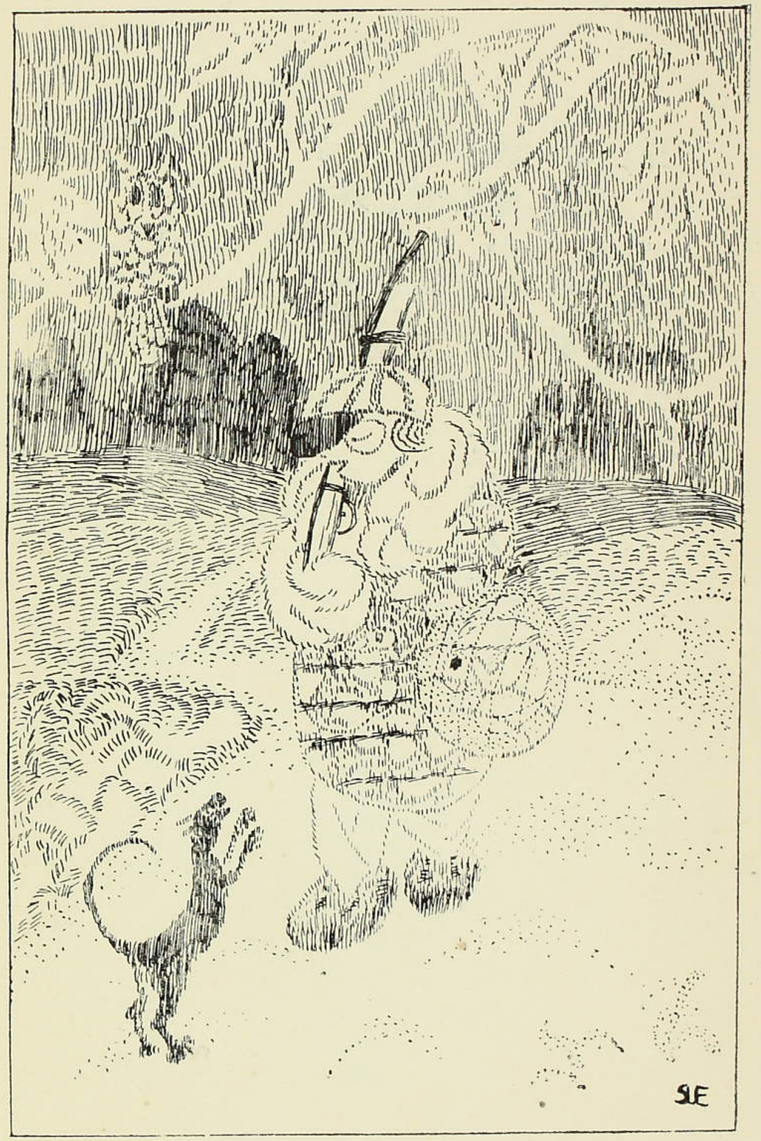
大雪、小雪、
雪のふる窓に、
誰か、ひとり、



「生膽貰はう。」
「その子を貰はう。」

大寒、小寒

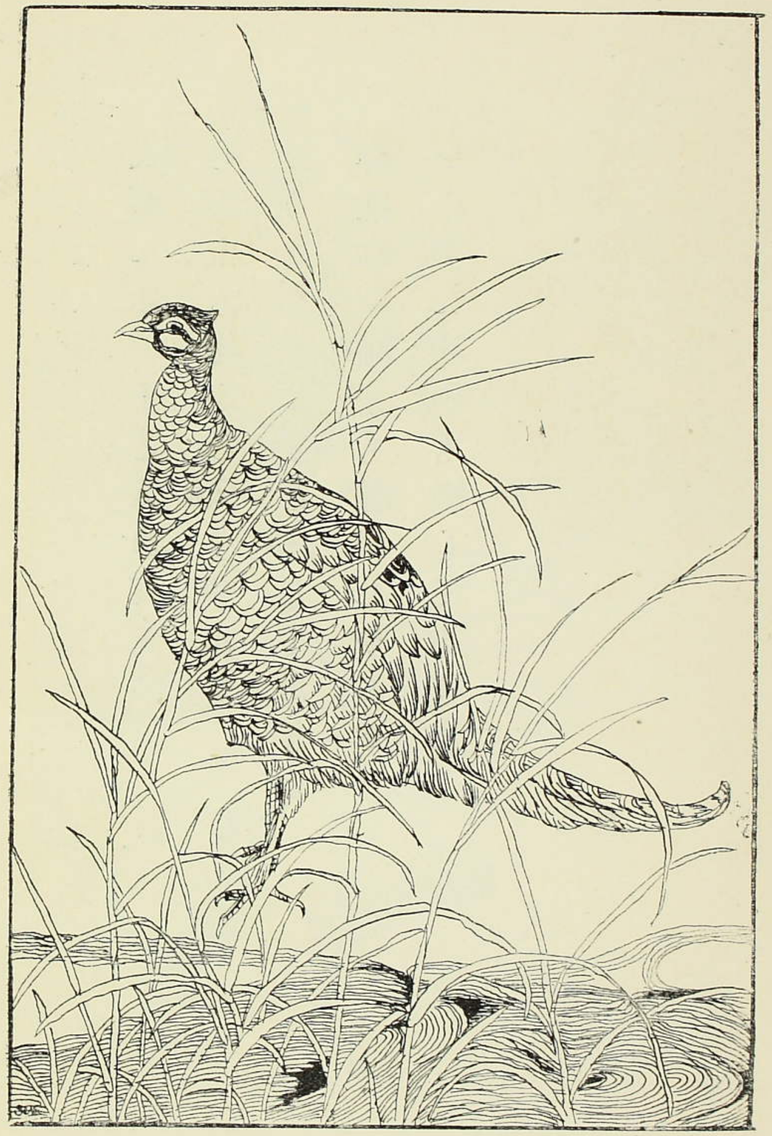
大寒、小寒、
雪靴はいて、
鐵砲かついで、狩場の歸り。
お腰の獲物は何々ぞ、
兎が一匹、鳩三羽、



びいびい鵜はかはいそで、
衣嚢にポッポと入れてある。
そんなら寒かろ、入りやんせ、
ゐろりをどんどと燃してあぎよ、
緋羅紗の帽子も脱がしやんせ、
ついでに鐵砲も燃してあぎよ。

雉子の尾

雉子の尾、
雉子の尾、
雉子の尾は綺麗よ、
青、赤、黄や褐、その尾の縞は何段か、
當てた子には雉子やろ、

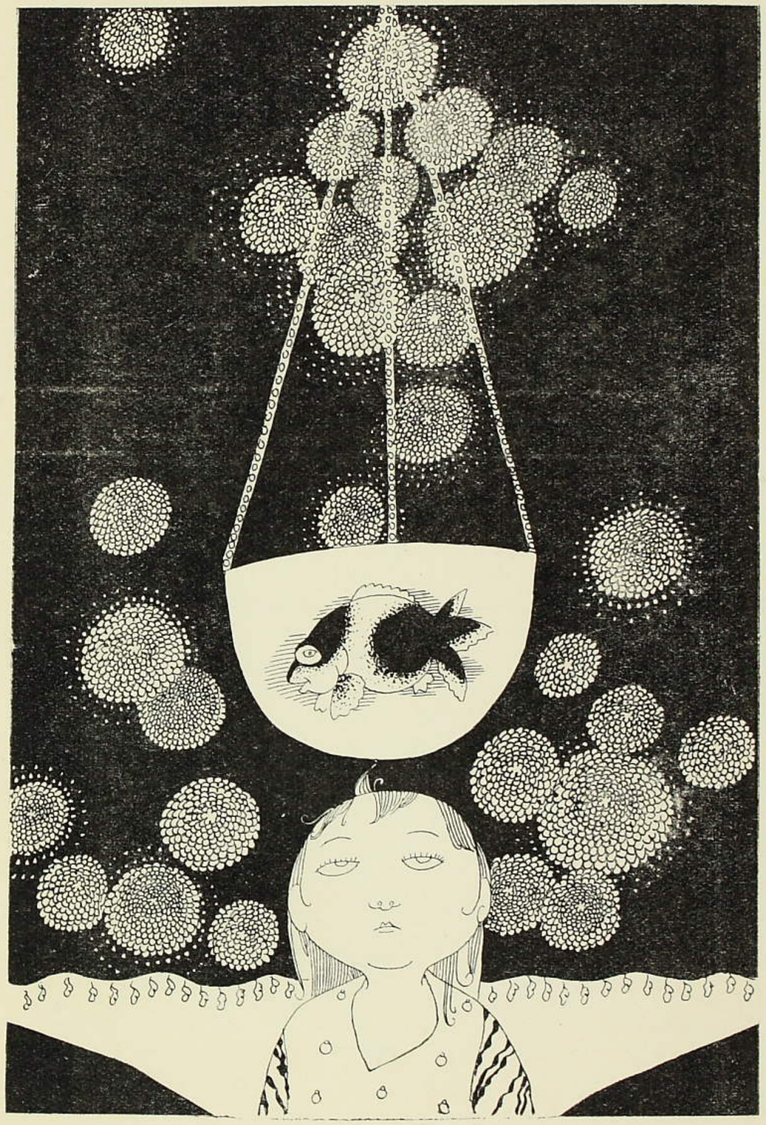


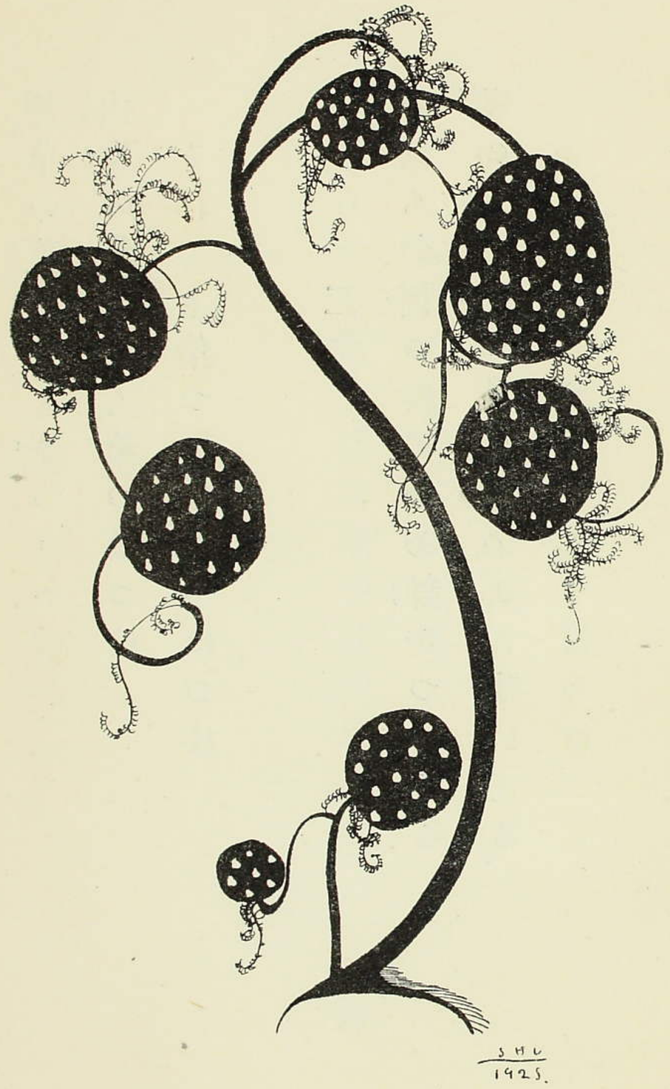
當てない坊主にや蝮やろ。

わたしの家

金魚の鉢に、
金魚が住んで、
金魚が死んだら、
蟾蜍が住んで、
私の家でござる。

私の家でござる。
蟾蜍はいやよ、
松の葉の針で、
左の眼をチクリ、
右の眼をチクリ。
あ痛、あ痛、あ痛つた。
あ痛、あ痛、あ痛つた。





葉つぱつぱ

一

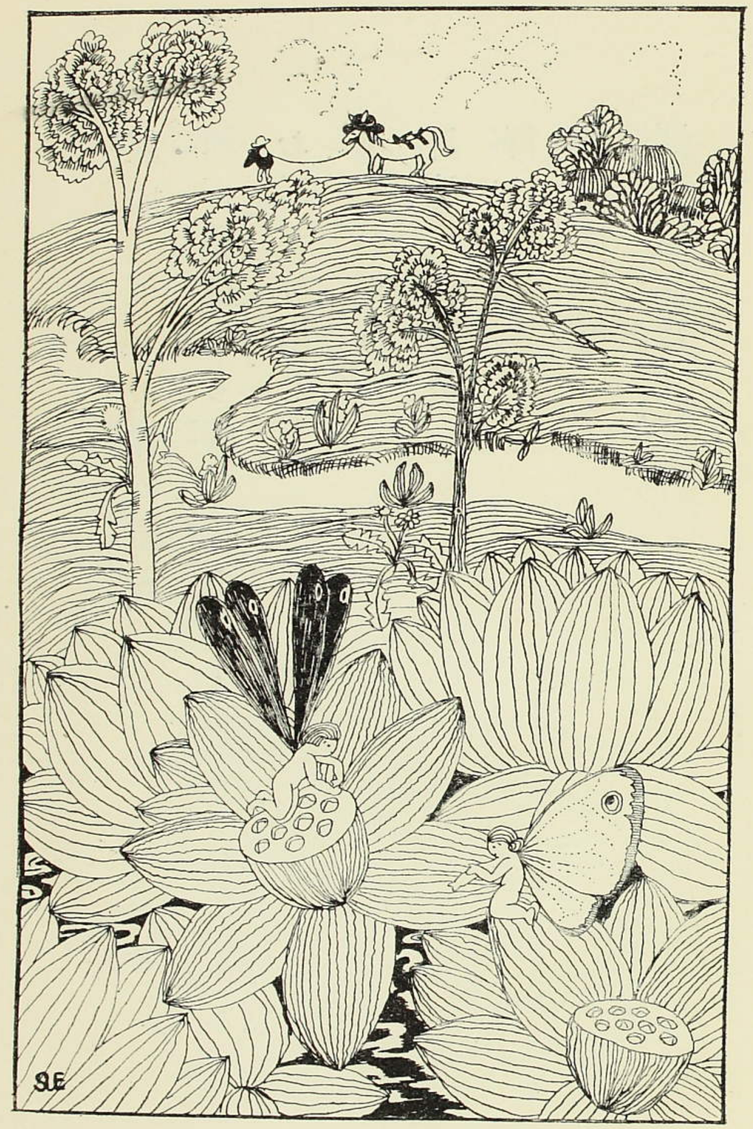
杏の葉つぱは杏の香がする。
蜜柑の葉つぱは蜜柑の香がする。
それでも葉つぱは葉つぱつぱ。

煙草の葉っぱも葉っぱっぱ。
山椒の葉っぱも葉っぱっぱ。
それでも葉っぱは葉っぱっぱ。

二

いばらの葉っぱにやお針がついてる
花の無い葉っぱは花のよに咲いてる。
それでも葉っぱは葉っぱっぱ。

緑の葉っぱも葉っぱっぱ。
眞紅な葉っぱも葉っぱっぱ。
それでも葉っぱは葉っぱっぱ。



お馬暑かろ

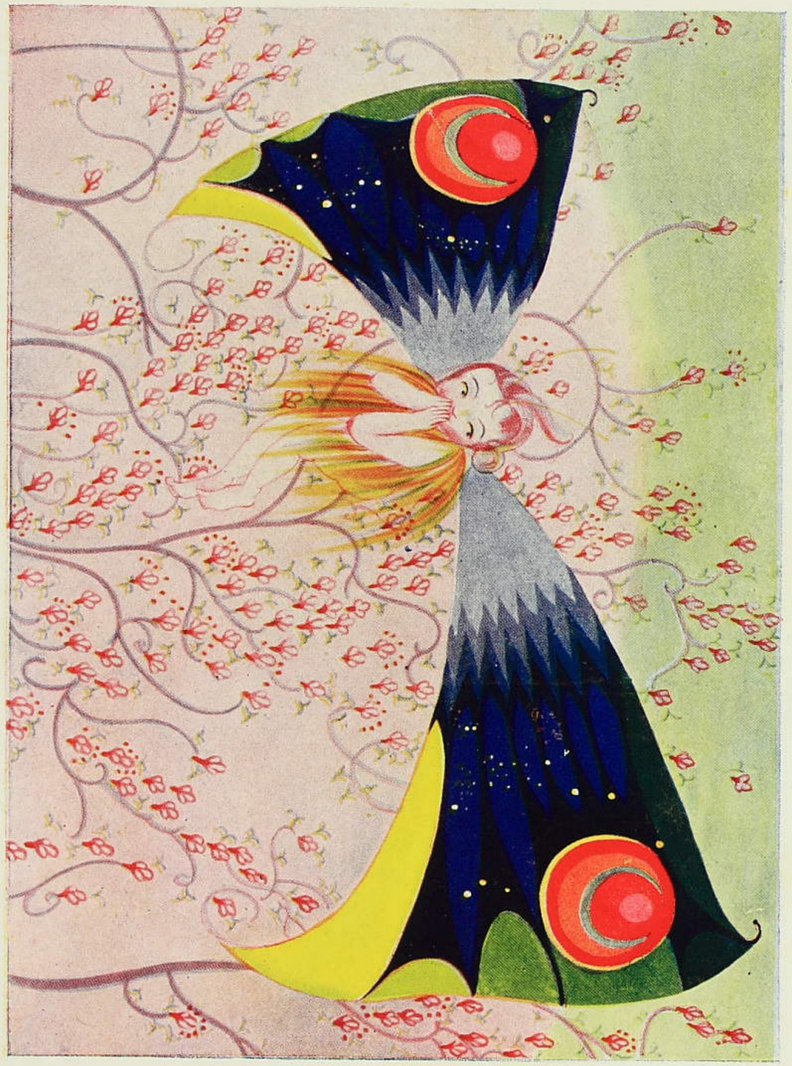
お馬暑かろ、
草山越えて、
てつくりてつくり越えて、
町へ出たらば麥つ粉を賣つて、
とても大きなハイカラ帽子かぶしよ。

紅いリボンか、緑の紐か、
鍔が邪魔なら圓い孔あけて、
お耳だけ出して、
海へ行かうか、
川邊へ行こか、
海は涼風、
川邊は日蔭、
間の蓮田は花盛り、

白い蓮華の花盛り。

麵麭と薔薇

今朝も町から、
溫かい麵麭買つて、
手籠に提げて、
牧場通れば仔馬が跳ねる。
その麵麭おくれ、



この薔薇あげる。

麵麭を半分配けて、
紅い薔薇もらつた。
早う行つて食べよ、
早う行つて活けよ。

蝶々と仔牛

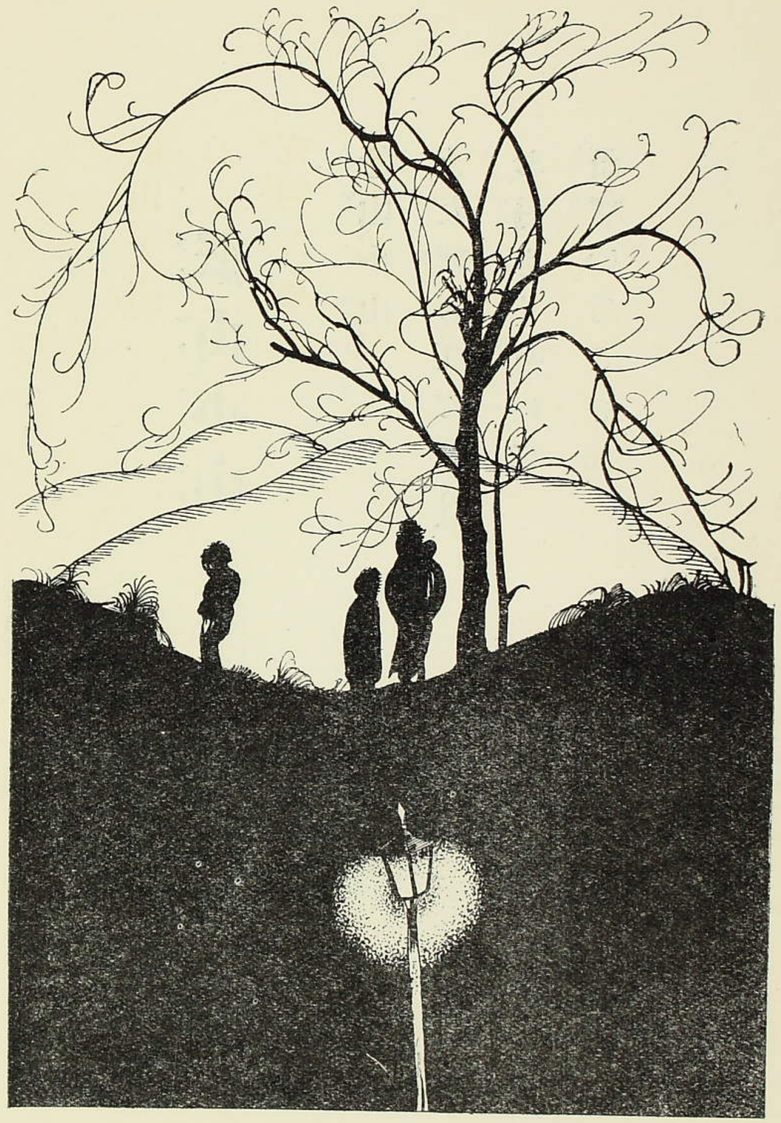
蝶々蝶々、
ひらひら飛べよ、
仔牛の角に
さはらぬほどに。
ねんねのゆめを

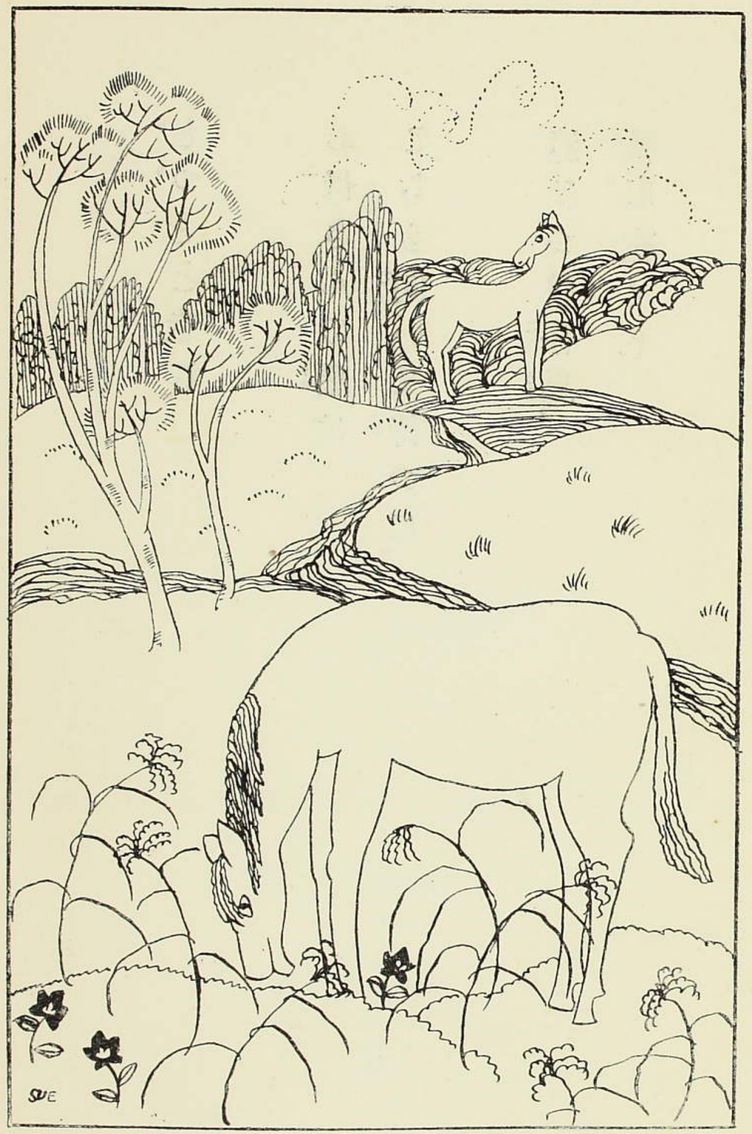
覺まさぬほどに。

低山、小山

低山、小山、
まだ起きてござれ、
お月さま紅いに
笛吹いてござれ。

低山、小山、
ねんねしてござれ、
夜明の星が
まだ出ぬほどに。





仔馬の道ぐさ

道草しずと、
早よ駈け、仔馬。

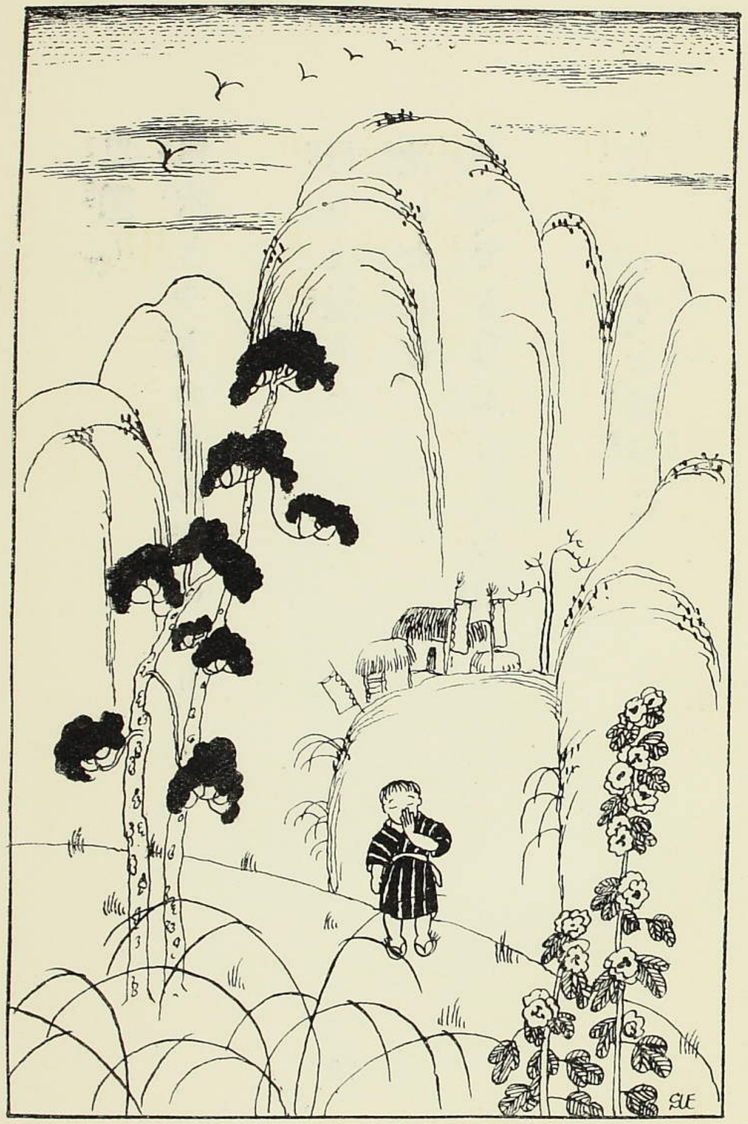
かるかや、桔梗、
すすきの原を。

とつとと走れ。

お母さんの馬は
こちら向いて待つに。

追ひつけ、仔馬、
秋風吹くに。

とつとと走れ。



里ごころ

笛や太鼓に
さそはれて、
山の祭に來て見たが。
日暮はいやいや、

里戀し、
風吹きや木の葉の音ばかり。

母さま戀しと
泣いたれば、
どうでもねんねよ、お泊りよ。

しくしく、お背戸に

出て見れば、
空には寒い茜雲。

雁、雁、棹になれ、
前になれ。
お迎ひたのむと言うておくれ。

夢の小函

かはいいお夢は桃色、
怖いお夢はねずみ色。
夢の小函を賣る舗は
月夜の涯の飾り窓。

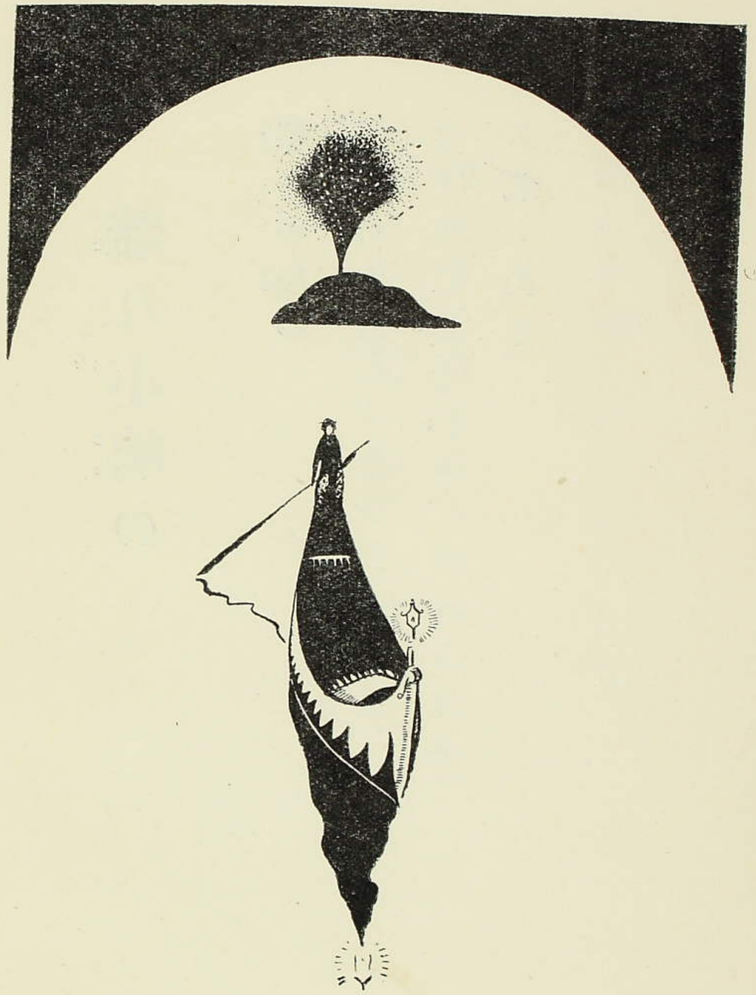
かはいいお夢がほしいなら、
桃色鸚哥にもらひましよ。
怖いお夢でまろしけりや、
鼠のお化に頼みやんせ。
かはいい小函を買ひましよか、

怖い小函をあげましょか。

泣かずにねんねや、おねんねや、
泣いたら鼠に告げてあぎよ。

離れ小嶋の

離れ小島の
椰子の木は、
なアぜに寝ないぞ、
お眠らぬぞ。



都の空が
戀しのか、
雪夜の燈を
夢見てか。

離れ小島の
椰子の木は、
紅い月夜に

ただひとり。

今夜のお月さま

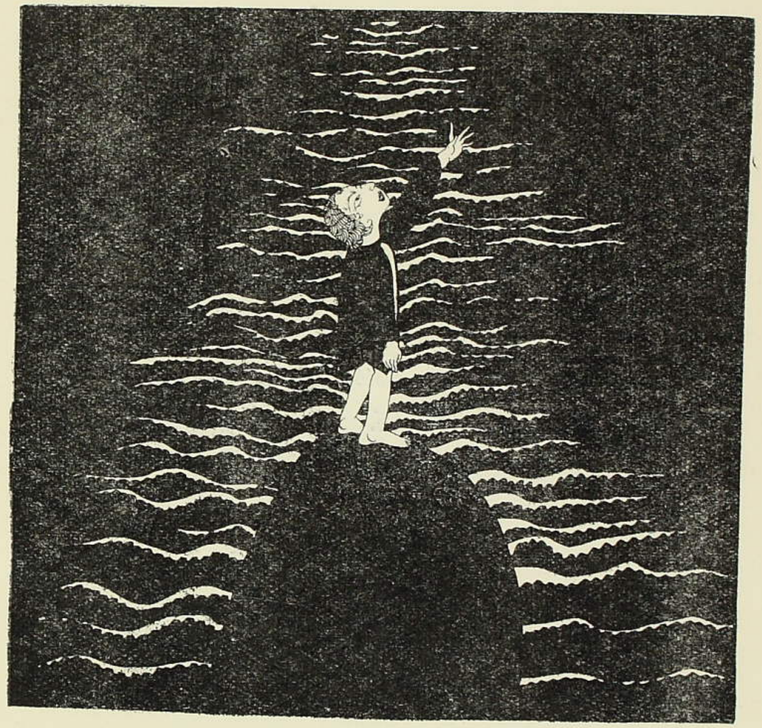
海のあなたに出た月は
今夜はべに色、
茜色。

父さま若しかと出て見れば、

お船の煙も
まだ見えぬ。

いくさが果てたか、死んでてか、
お鳩のたよりも
まだつかぬ。

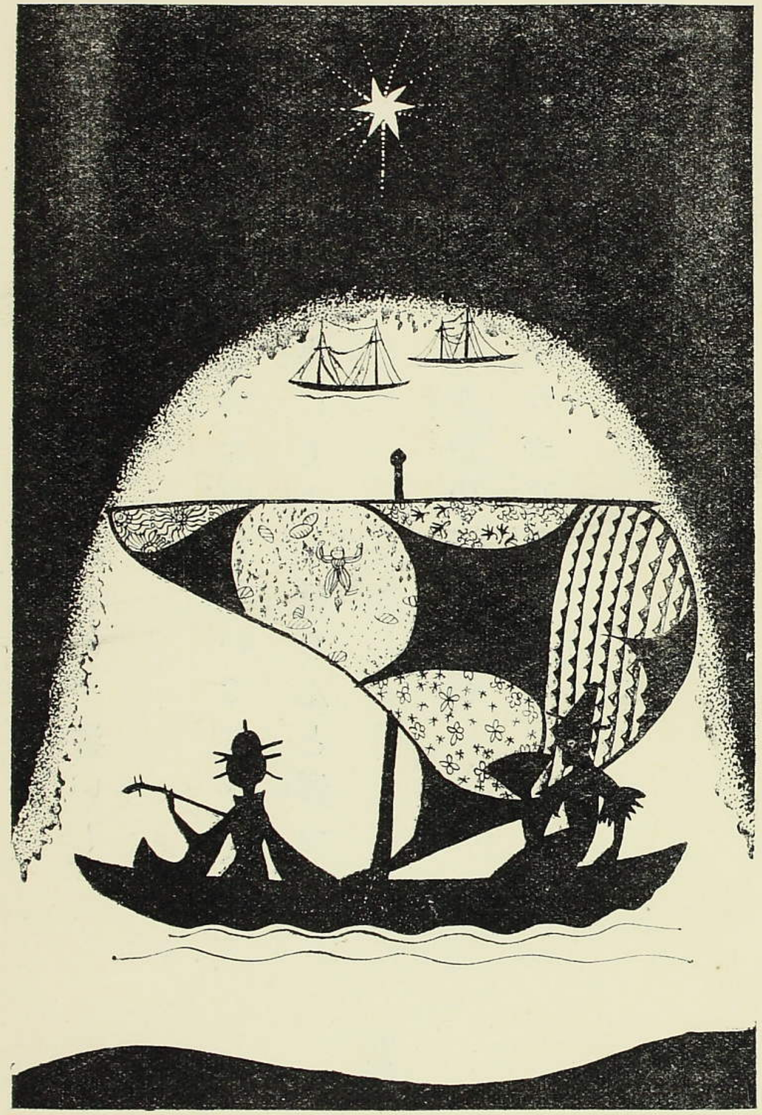
今夜のお月さまなぜ紅い、



血染の色して
なぜ紅い。

九十九島

寒い寒い晩よ、星のゐる晩よ、
むかしむかしよ、とんとの大むかし
大島小島が九十九と一人、
お酒のみましよ、酒宴しましよ。



そこで一人が酒買ひにやられた、
海上はるばる長崎へまゐつた。

その子酒ずき、酒屋は出たが、ね、
ついと、とろんと、みな飲んで了うた。

お日がさめたら早や夜が明けて、よ、

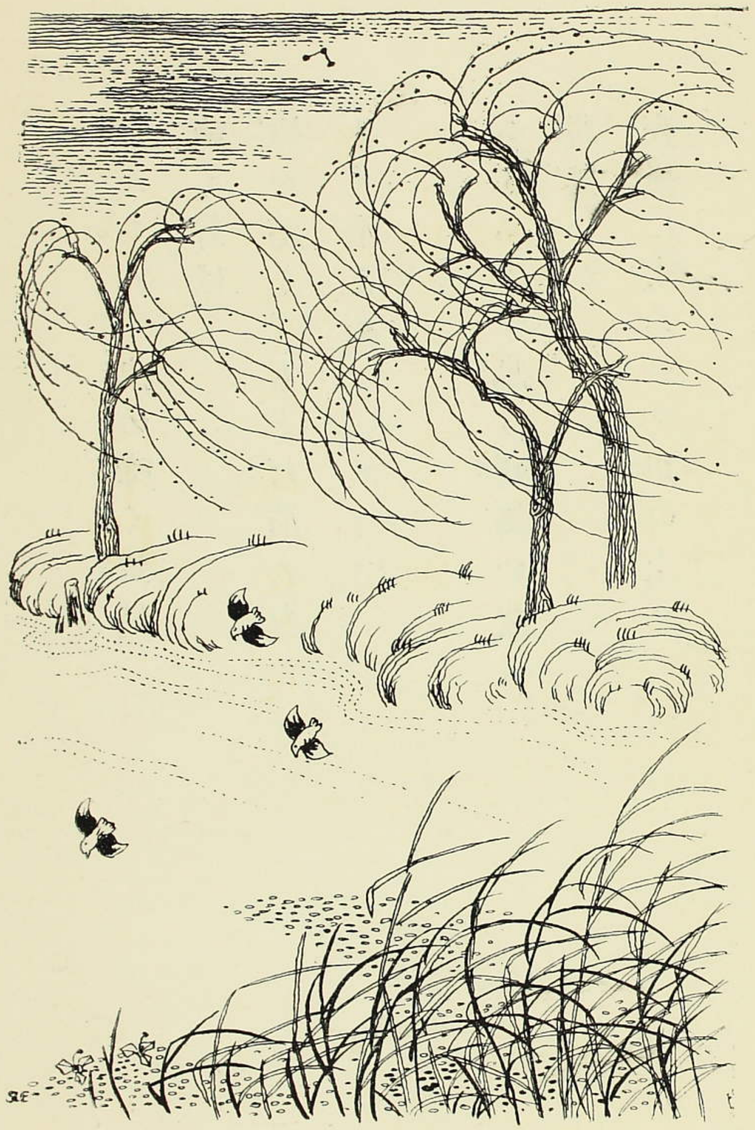
泣くにや泣かれず、戻ろにや遅いし。

こいつしまつた、面目ないでござる、
たうとう港にちよんぼりんと留つた。

九十九島は平戸の瀬戸よ、ね、
一人長崎、それが高島よ。

そこで酒宴おオ流れ、
おオ流れ。
まづまづ一貫貸しました。

（手まり歌）



ちんちん千鳥

ちんちん千鳥の啼く夜さは、
啼く夜さは、
硝子戸しめてもまだ寒い、
まだ寒い。

ちんちん千鳥の啼く聲は、
啼く聲は、
燈を消してもまだ消えぬ、
まだ消えぬ。

ちんちん千鳥は親無いか、
親無いか、
夜風に吹かれて川の上、

川の上。

ちんちん千鳥よ、お寝らぬか、
お寝らぬか、
夜明の明星が早や白む、
早や白む。

白い牛黒い牛

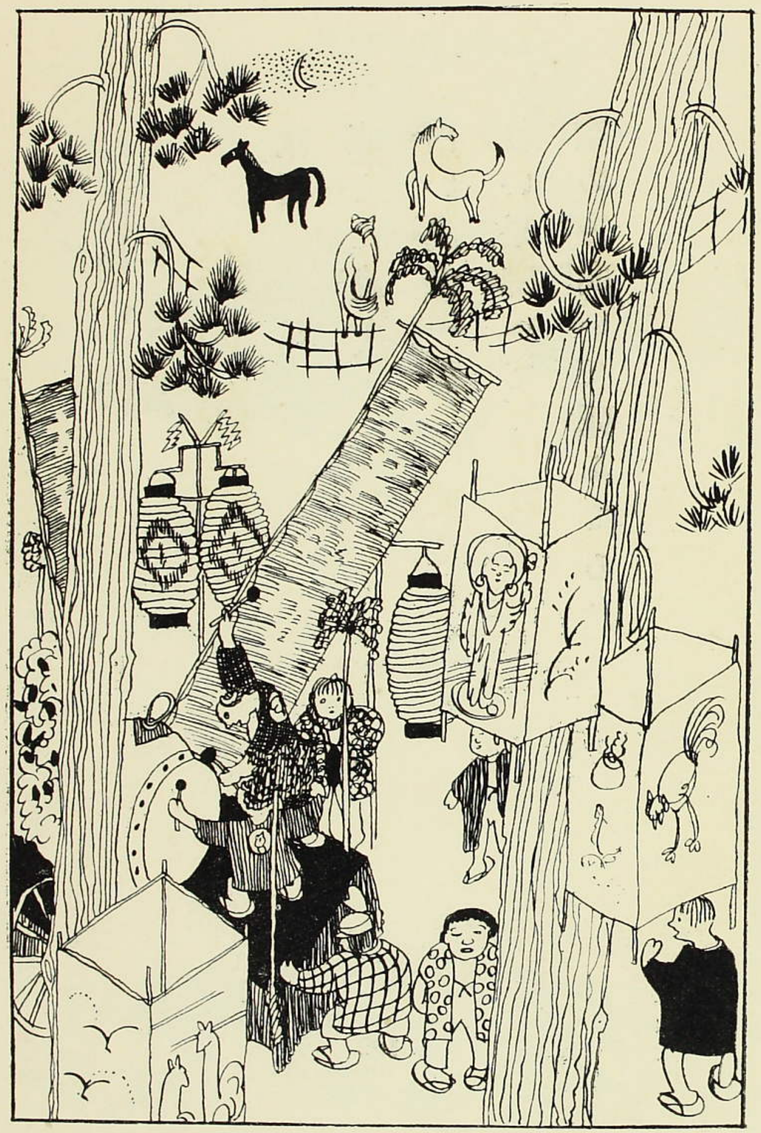
大空の下に、
白い牛がひとり、
北の方を向いて。
黒い牛がひとり、
南の方を向いて。

なぜ仲わるいぞ。
なぜ外方向くぞ。
わたしはお腹が痛ござる。
わたしはお乳が痛ござる。
彼奴が、其奴が蹴りました。
怒るな、怒るな、

野は花盛りだ、
白い牛もこつち向け、
黑い牛もこつち向け、
もう丁度晝飯だ。

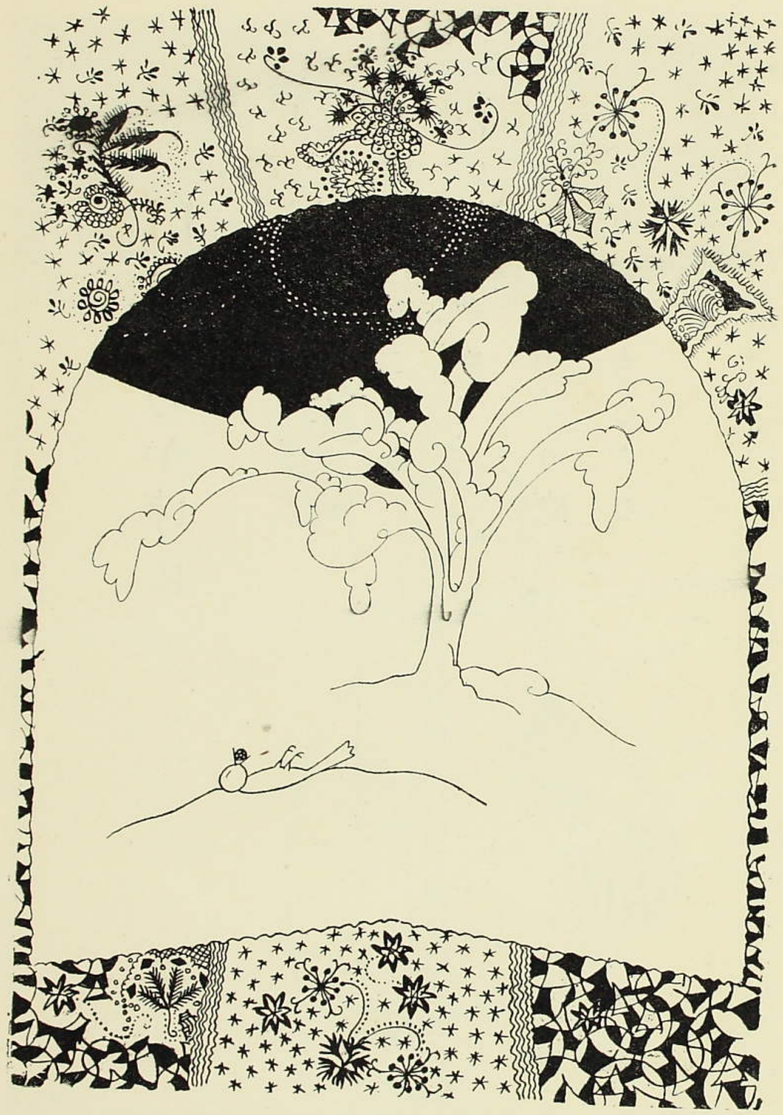
白い白いお月さま

白い白いお月さま、
枯草百貫乾しました、
今夜は紅う照つてくれ。



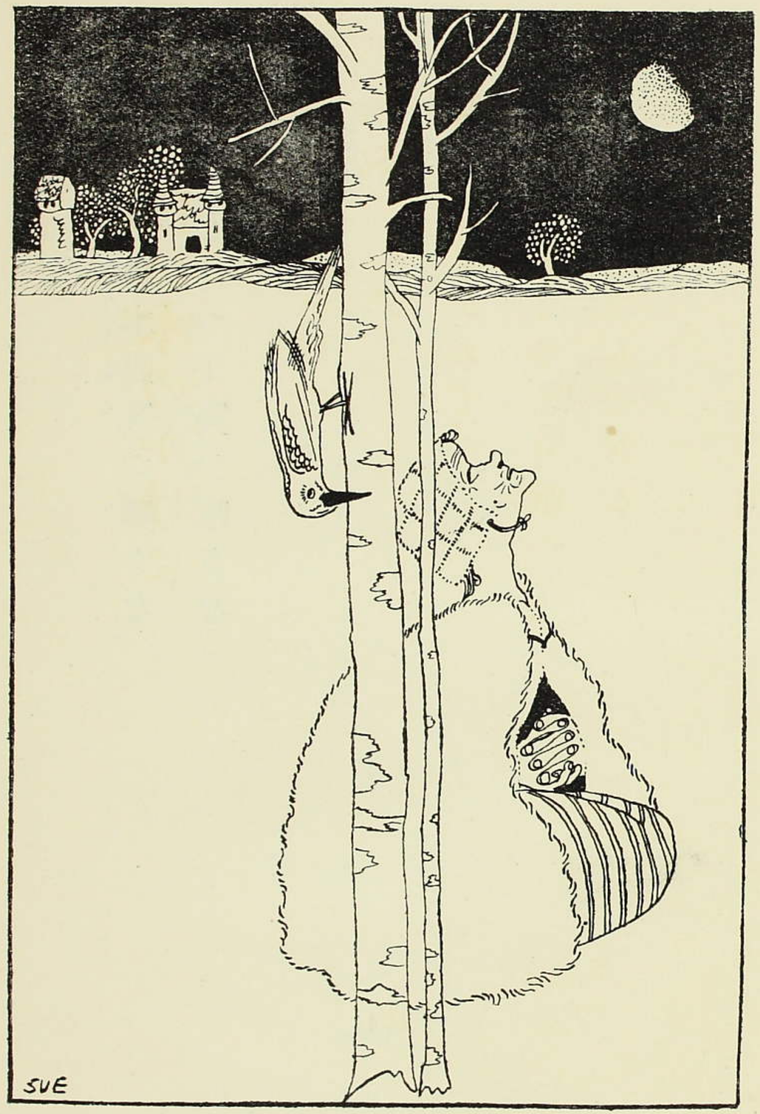
祭の競馬

小さな白いお月さま
朝から祭を見に來ても、
まだ馬がそろはぬぞ、
まだ馬がそろはぬぞ。



白い鳥

吹雪の晩に
凍えた鳥か、
白い鳥が一羽
紅い果啣へて、
空の方向いて死んでゐた。



白い木のかげに

白い木のかげに
お婆さんがござる。
白い月ながめて、
こつくりこつくり眠つて、
いつもいつもござる。

啄木鳥、啄木鳥、突つ啄きな。
一寸と行つて突つ啄きな。

蜂の子

雪こんこんつもつた、
まつしろにつもつた、
棕梠つ葉はどこだ、
蜂の巣はどこだ、
紅い提灯つけて

凍えた蜂の子さがァそ。

肩ぐるま

小さな蝸牛を
お父さんの蝸牛が肩車に載つけた。
そら伸びあがれ、
もそつと伸びあがれ。
お祭が見えるぞ、

御神輿が見えるぞ。

栗と小栗鼠

栗の實が落ちた、
それ見て、小栗鼠
ちよろちよろ拾つた。

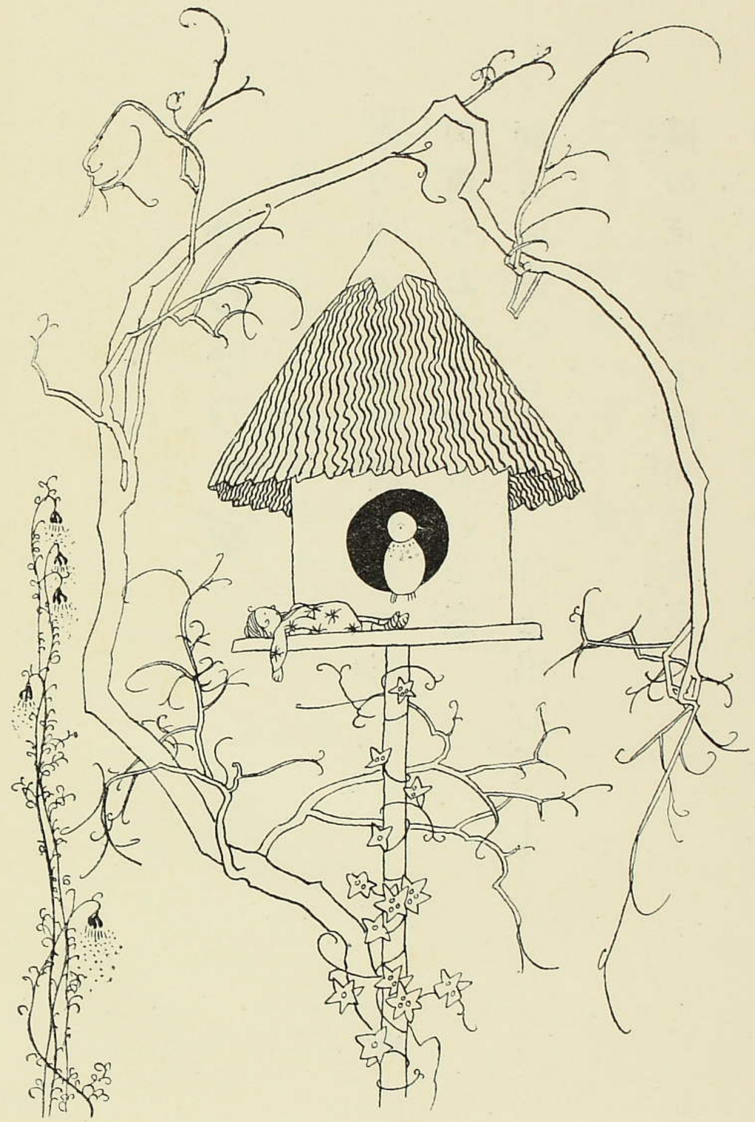
栗の實はうまいな、

ちょいと立つて、小栗鼠
むつくりむつくり食べた。

風吹いた、かァさかさ、
逃げ出して、小栗鼠
お母さんのお乳に取りついた。

ぽつぽのお家

ぽつぽのお家は四角なお家、
四角なお家の圓るいお窓、
圓るい窓から頭を一寸と出して。——
隣のぽつぽも四角なお家、



四角なお家の圓るいお窓、
圓るい窓から頭を一寸と出して。——

ぽつぽう、お早う。
ぽつぽう、お早う。
おお、ぽつぽう、よう。

げんげの畑

げんげの畑にゐる雀、
前向き、
横向き、
うしろ向き。

ちらちら照られて何爲てる、
孩兒でも
お産みか、
お祭か。

いやいや、ねんねが死にました、
いたちに
喰はれて、

羽根ばかり。

大正十年五月十三日印刷
大正十年五月十八日發行

「兎の電報」
定價壹圓九拾錢

著作者　北原白秋

發行者　東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社アルス代表者
北原鐵雄

發行者　東京市神田區中猿樂町十五番地
鈴木泉藏

印刷者　東京市小石川區久堅町四十五番地
山本源太郎

發行所　東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社　アルス
振替東京二四八八番
電話九段二一六九番

白秋詩集 第一卷

白秋氏の全詩を盛れる六百有餘の燦然たる美本

明治大正の詩歌を代表する巨匠白秋氏の全詩集成る。本書第一卷は青燈集、赤い鳥小鳥、大悲集、畑の祭、雪と花火の五集三十二章總詩數實に參百有餘篇を收むるものにして、未發表の近作全部を包含するもの也。純情涙を流すべき小唄ありの歡樂境地を歌へる短唱小曲あり、幽玄深遠なる象徵詩ありの輕快歌ふべき俗謠あり、天眞自ら成せる童謠あり、法悅光明印象の筆觸鮮らしき景物詩あり、自由奔放なる散文詩體ありの各種の詩風交錯して燦然絢爛曾て見ざるの壯觀を呈し渾然美妙の一大交響樂を形成す。本書は實に新鑄ポイント活字を以てせる六百餘頁の尨然たる大詩集にして、恩地孝四郎氏の裝幀及扉畫眞に淸麗高雅藝術の士の愛誦すべきもの、書架に傳ふべきもの、本書を措いて何を他に求めんや。

中判箱入美本——恩地孝四郎氏裝幀

定價貳圓八拾錢　料拾貳錢

白秋詩集 第二卷

日本詩壇に永遠不滅の光輝を放つ白秋氏の全詩集愈完成す。

第二卷成る。本卷收むる處、象徴の秘奥、官能の極致、アブサンの芳香を偲ぶべき『邪宗門』純情涙を流して歌ふべき抒情小曲集『思ひ出』及氏が一擧にして詩壇に名聲を贏ち得たる大長篇詩、林下の默想、全都覺醒賦、春海夢路、繪草紙店を始めとして才華爛漫たる少年時代の諸篇を收むるもの也。日本詩壇永遠不滅の金字塔たるべき白秋氏の全詩集は本集第二卷を以つて一先づ現在に至る全作品を網羅し茲に第一期の完成を告げたり。

定價貳圓八拾錢送料拾八錢

繪入童謠

玉眼のぼんと

北原白秋氏著

矢部季氏裝幀及畫　清水良雄氏畫　初山滋氏畫

全國を風靡せる白秋氏の童謠集が出來ました。子供が手を叩き足を跳らして喜んで歌ふ唄はこれです。日本が上下三千年を費してやうやくただ一人生み得たる文字通りの最初の民謠詩人の傑作として永久に傳へらるべき製作はこれです。殊に本書の誇とすべきは裝幀に挿畫に最善の華麗をつくしたことで童謠一篇ごとに燦然たる色刷の挿畫を一葉づつ附してあります。

原色版、色刷挿畫二十八葉。忽五版

定價壹圓九拾錢　送料拾錢

白秋小唄集

北原白秋氏著

小唄二百餘篇。燦爛寶玉の如き歌集

雨はふる、ふる、城ヶ島の磯に
利休鼠の雨がふる。
雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍ひ泣き
（城ヶ島の雨の一節）

歌ひ易く解し易く愛誦措く能はざる小唄二百餘篇を收む
附錄「さすらひの唄」「酒場の唄」「こん度生れたら」「カルメンの唄」「山の唄」「別れの唄」本文二度刷、表紙サラセン模樣絹繻子表紙袖珍判箱入

好評嘖々忽十版。日本詩壇の聖書

定價壹圓八十錢　送料六錢

白秋小品

北原白秋氏著

寶玉の如く輝かに毒草の如く香高き白秋氏の散文を見よ。新鮮なる感覺と强烈なる印象と詩以上の美と鋭さを示せる氏の小品を見よ。本書收むる處紫の煙ほのかに簡素靜寂を極むる田園手記『葛飾小品』を卷頭に、芳烈なる熱帶の色彩美しき絶海の孤島の怪奇なる物語を收たる『小笠原小品』、瀟洒清新の筆致懷かしき『桐の花小品』、氏の出世作にして日本文壇に一新體を創始せる氏が半生の自叙傳『生ひたちの記』、南國の匂新らしき『朱欒のかげ』、其他『植物園小品』『折々の手記』七篇二十七章、すべて玉蟲の怪しき光と天鵞絨の惱ましき手觸りを偲ぶべき燦然たる一大散文集也。

◆裝幀矢部季氏。血の如き眞紅の布に螢の模樣を印し深碧の海の色の絹繻子を以てはぎ分けたる箱入小形美本◆

定價二圓　送料八錢

抒情小詩 わすれなぐさ

北原白秋氏著

斯の如く美しく、優しく、懐しき詩集他にありや

なわすれぐさ

面帕のうしろに見えて、
その眸にほふごとくも、
空いろに透きて、葉かげに
今日も咲く、なわすれの花

本書はその美しさ、懐しさ讀めば涙も溢れ出づべき白秋氏の抒情小曲を收めたものである。裝幀は山本鼎氏白金の光澤美しき絹繻子にクロバーと螢の模様をあらはした瀟洒清新の趣は見るからに心躍るばかりである

定價 壹圓八十錢 送料 八錢

忽 十二版。眩 目 燦爛たる美裝

SHL